

依存症者の“生きづらさ”に着目した類型化の試み(2)

— ロールシャッハ・テスト上の Lerner 防衛尺度による原始的防衛の群別比較 —

板橋登子・早坂透・赤坂三恵・池田真理子・瀬底正有・岡田晋・中里容子・福永薫子・我妻優 (神奈川県立精神医療センター)

目的 依存症のロールシャッハ・テスト(以下ロ・テストと略記)の特徴として、依存と攻撃の未分化などが指摘され、主要な防衛機制として否認と投影性同一視を挙げる研究も見られる。そのようなパターンから実生活で生じる行動の統制困難、もしくは人との間で不安の解消や欲求の充足ができず物質に耽溺するような“生きづらさ”は、治療的対人関係で生じる力動、退院後の自助グループ参加の継続や適応にも影響しうる。そのため、依存症者の、特に対人関係の文脈における防衛機制を把握することは有用と考えられる。

先に我々はアルコール・薬物依存症の入院患者を対象としたロ・テストの主なスコアからクラスター分析を行い、表 1 のような 4 類型を見出した(板橋・早坂,2014)。今回の研究においては、各グループの比較検討を、人間反応に注目し、その内容や説明から推測される原始的防衛機制から行うことを目的とする。

方法 分析の対象は、アルコール依存症または薬物依存症の診断で依存症専門病院に入院し、H22.6~26.2 の間に主治医のオーダーによりロ・テスト(片口法に準拠)を実施した 134 名(平均年齢 39.62 ± 10.50 歳、男性 85 名、女性 49 名)で、前述の我々の研究により表 1 のような 4 グループに分類されている。原始的防衛機制について、Lerner Defense Scale (Lerner&Lerner,1980)を用いて評価を行い、分裂・投影性同一視・価値下げ・理想化・否認それぞれが認められた人数について、Fisher の直接確率検定により出現率の偏りの有無を検討した。また、分裂・投影性同一視についてはその出現頻度、価値下げ・理想化・否認についてはレベルの重み付けを含めた得点を算出し、Kruskal-Wallis 検定により比較を行った。

表 1 依存症者のロ・テスト 4 類型(板橋・早坂,2014)

スコアリング上の特徴	スコアリングから読み取れる傾向
Group A (N=37) 高: WM, F+, H+, P+ 低: F+, A+	豊かな反応性あり現実対良好だが、要求水準高くありふれた現実には満足できない可能性もある
Group B (N=37) 高: F+, A+, P+ 低: M, FM, FC, CF+, C, H+, mBRS	紋切的な順応が可能だが、精神活動が不活発で自我の統制も弱い
Group C (N=20) 高: CF+, C, ContentRange 低: F+, A+, F+, P+	情緒反応性や興味関心の広さはあるが、情緒統制や現実検討に弱く、主観的になりやすい
Group D (N=40) 高: R, D, Dd+, S, M, FM, FC, A+, P+, A+ 低: F+, H+, P+	一生懸命反応するが可塑性や抽象性を欠き、対人的な不安・身体化させやすい傾向もある

結果 各防衛機制の出現率を表 2 に、分裂・投影性同一視の出現頻度と価値下げ・理想化・否認の合計得点の平均値を表 3 に、それぞれ整理した。

表 2 各防衛機制の出現率

	Group A (N=37)	Group B (N=37)	Group C (N=20)	Group D (N=40)	
分裂	21.6%	5.4%	40.0%	17.5%	p<.05
投影性同一視	0%	2.7%	15.0%	22.5%	p<.01
脱価値化 1	16.2%	2.7%	25.0%	10.0%	ns
2	8.1%	5.4%	5.0%	17.5%	ns
3	40.5%	13.5%	20.0%	25.0%	ns
4	0%	2.7%	10.0%	2.5%	ns
5	37.8%	13.5%	35.0%	40.0%	p<.05
理想化 1	37.8%	10.8%	45.0%	20.0%	p<.01
2	27.0%	0%	25.0%	7.5%	p<.01
3	2.7%	2.7%	10.0%	12.5%	ns
4	0%	0%	0%	0%	ns
5	27.0%	2.7%	30.0%	10.0%	p<.01
否認 1	29.7%	10.8%	25.0%	17.5%	ns
2	10.8%	2.7%	15.0%	7.5%	ns
3	2.7%	5.4%	10.0%	7.5%	ns

表 3 各防衛機制の出現頻度

	Group A (N=37)		Group B (N=37)		Group C (N=20)		Group D (N=40)		
	Mean	Median	Mean	Median	Mean	Median	Mean	Median	
分裂	0.32	0	0.08	0	0.45	0	0.18	0	p<.05
投影性同一視	0.00	0	0.08	0	0.15	0	0.30	0	p<.01
脱価値化	5.24	3	1.62	0	3.85	2	4.80	3	p<.01
理想化	2.94	2	0.95	0	5.45	1.5	1.67	0	p<.01
否認	0.64	0	0.25	0	0.95	0	0.65	0	ns

分裂・投影性同一視・脱価値化・理想化において出現率と出現頻度に有意差が見られた。一方、否認には有意差は見られなかった。

考察 Group A は理想化と脱価値化が優勢で、自尊心を維持するために関わる相手や身を置く環境を理想化するが、そこで受け入れられないと途端に価値下げに転じ、過剰適応とドロップアウトを行き来するパターンが窺われる。Group B は人間反応の出現率の低さのため、いずれの防衛機制の出現も少なく、対人関係への興味関心の希薄さや、自身の感情・欲求を他者との間で調整することの難しさが課題となると考えられる。Group C は分裂と理想化が優勢で、自身の欲求により対象を破壊してしまいそうな罪悪感や恐怖感を抱え、all good の片顔を相手や環境に投影させてそこにすがり付くことで、破壊的な害悪から自他を守ろうとすることが推測される。Group D は投影性同一視と脱価値化が優勢で、外界に対する怒りや恨みなど all bad の片顔を投影し、“相手や環境が自分を襲ってくる”という迫害感から、対人関係に攻撃的あるいは回避的になることが推測される。このように、ロ・テストのスコアリングから分類された 4 つのグループは、対人関係の文脈で作用する防衛機制のパターンにおいても異なる特徴を示し、それぞれの抱える生きづらさに寄りそう治療や支援の指針の一助となることが示唆された。

キーワード: 依存症、ロールシャッハ、原始的防衛